

金時山へ

岩井 淑

「隣の登山者が白馬岳とか強力伝を読んだよ……なんて言っていましたがけれど、新田次郎の書いた『強力伝』や『蒼水』と何か関係があるのですか。」

とアンパンマンのような丸顔の茶屋の娘さんに尋ねた。

「私のおじいちゃんなんです。『強力伝』のモデルになったのがおじいちゃん、おかあさんは娘で私が孫です。」

の答えが帰ってきた。

「えっ？本当ですか…それはどうも」

あとの言葉が続かなかった。作中のモデルになった人の肉親に思いがけないところで会ったからである。

気象庁の技官であり自然科学者であった藤原寛人が新田次郎のペンネームで『強力伝』を書き、直木賞を受賞したのは周知のことである。私は新田次郎の作品のリアルに描き出される自然情景とそこに展開される人間のドラマが好きでよく読む。特に「山岳文学」といわれている諸作品はほとんど読んでいたのである。『強力伝』も当然のこと読んだし、主人公である強力の子宮正作は『蒼水』でも登場するので茶屋の娘さんへの質問となったわけである。

娘さんは私の質問に答えた後、おかみさんのところへ戻って「あのお客さん、『強力伝』読んだって…」などと話していたと思ったら、おかみさんがやってきて

「あの中に鶴子っていう子供がでてくるでしょう。それが私です。新田次郎さんの13回忌も先日済んだんですよ」

と自己紹介された。

私の頭は、そうかもう13年にもなるのか。確か毎日新聞の朝刊にオランダ人を主人公にした連載小説を執筆中に亡くなったんだ、と思ひだし『強力伝』の内容と登場人物が動き出した。主人公が白馬岳山頂へ方向指示盤を担ぎ揚げる途中での並々ならぬ苦労と、足元に咲いている可憐な花を押し花にして娘の土産にしようとしている情景が徐々に浮かんで来たのだった。

小田原から乗ったバスは40分ほどかかって仙石へ着いた。ここから御殿場行きへ乗り換えなのだが予定時刻表を見ると2時間後でないとバスはない。乙女口まで歩くことにした。

乙女口から30分ほど登ると突然、正面に8合目から上を雪に被われた富士山が現れた。まったく突然であった。そこが乙女峠であった。峠には桜の木が1本植えられ、その脇に次のような峠のいわれが書かれていた。

昔、仙石原の娘が父親の病気を治そうと峠の地藏堂に日参し、満願の日に父親の病気は治りましたが、彼女は雪に埋もれて死んでしまった、と伝えられています。彼女の霊を哀れみ乙女峠と呼んでいます。

うーん、なるほどな。などと思いつつ説明文を読んだのだったが、乙女峠は富士山の絶景地である三峠のひとつに数えられているが、その景観をまったくの台無しにしているの

が『御殿場12景』なる看板であった。まだ立ててまもない縦3m、横2mほどのステンレス製の看板はおそらく行政が立てたものと思われるが、峠から望む富士山の正面に立てられているのだ。まったくばかげた看板であり、それがあることによって景観はものみごとに破壊されている。なぜ気が付かないのだろうか。

長居はしたくなかった。長尾山頂から金時山頂へ向かうために歩みだす。右側には箱根で一番高い神山が望め、そのふところの大涌谷からたちのぼる水蒸気ははっきりと目に止まり、鏡のような芦ノ湖の湖面をすべる遊覧船も見える。のどかなあと思う。

峠を振り返ると茶屋の緑の屋根の向側の北斜面の木枝に霧氷を認めた。氷の枝である。乙女口から峠に登るまでの道で3~4cmのつまようじのような氷を何度となく踏んだので、もしやと思っていたがおとといからきのうの朝方まで降っていた雨は、箱根では吹雪となっていたようである。富士山側からの強い北風とともに吹き付けたであろう雪が枝にへばりついているのである。霧氷は明るい南面からはほとんど姿を消したが、それでもたまにバサッパサッと枯葉の上に落ちて来るのであった。

1時間程尾根すじを登り降りしていると『天下の秀峰・金時山』という真白な三角錐が目飛び込んで来た。1213mの山頂である。石のほこらを挟んで2つの茶屋が建てられていた。つながれた白い犬が盛んに吠えてたてている。登山者が1人、岩の上で芦ノ湖方面を眺めている。私は犬の吠えるのに誘われたわけではないが、金時娘茶屋に入った。茶屋には4人の先客がおり、なにはなくとも渴いたのどを潤すために500mlのビールを頼んだ。ウグウグとどの落ちていく音がこころよい。2本目のビールを飲み始めた時に現れた3人の登山者とおかみさんのやりとりを小耳に挟んだのが茶屋の娘さんとの最初のやりとりだったのである。

茶屋はサービスがよかった。ビールを頼むとすぐにピーナッツの袋を開けてつまみとして出し、「これは私のところで漬けた水菜です。きらいでなかったら、どうぞ。」と言って漬物を持ってきてくれた。登山記録簿に記入を勧められたので、記入の前にパラパラと頁をめくりながら年齢の項を一通り見てみると最年少は3才であった。大と同じ年齢である。登頂コースは途中2~3箇所は親の手をかさない無理なところがあるが、おそらく乙女峠からの往復と思われる。

今回の山行はファミリー登山のひとつのコースとしての下調べの意味を持っているのだが、乙女峠往復のコースであれば3才になったばかりの大にも大丈夫だろう。

ビールを3本飲んで小田原駅で買ってきた弁当を食べると1時間を経過していたので、下山を金時神社コースにとり出発した。矢倉沢峠に建つ茶屋の緑の屋根と明神岳への登山道が箱根笹の中を蛇のように伸びているのが眼下に望める。まっすぐ降りれば矢倉沢峠へ行くのだが、途中で右に折れて下山する。金時が宿にしたといわれる真2つに割れた大岩の横を通り、杉林の中にひっそりとしている奥宮に出た。注連縄が張られ苔むした大岩を後ろ側から上に登ってみると石のほこらの前に1m程のマサカリが置かれていた。

仙石バス停まで戻り後ろを振り返ってみると、ピラミダルな山頂に白い三角錐の頂点が僅かに飛び出しているのが見える。再訪時は家族4人になるだろうとの思いを胸にバスに乗り込んだのだった。